

令和 2 年度学長戦略経費（重点分野研究プロジェクト）進捗状況報告書

（令和 3 年 3 月）

報告者氏名・所属	津田 拓郎（旭川校・准教授）	
研究プロジェクトの名称	中学校における前近代西洋史教育の再構築に向けた国際比較研究	
プロジェクト担当者 （氏名・所属・職） ※代表者に●を付すこと	●津田 拓郎・旭川校・准教授 稲葉 浩一・旭川校・准教授 森 悠人・旭川校・大学院生・六合中学校講師	
研究プロジェクトの概要等（期間全体）		
<p>本研究は、高等学校における「歴史総合」必修化に伴う中学社会歴史分野における前近代外国史教育の重要性増大を念頭に置き、道内及び国外の中等教育(特に中学校相当)における前近代外国史教育の現状と課題を分析し、限られた授業時間の中でグローバル化の時代に適合した世界史像を教育できるような授業開発を行うものである。研究代表者は西欧中世史の専門家であり、社会調査の専門家が研究分担者としてプロジェクトに加わるほか、ドイツのギムナジウムで教鞭を取る歴史教諭の協力をも仰ぐことで、先行研究とは全く異なる形の大きな成果が期待できる。</p>		
進捗度	2	←番号を記入 1.順調に進んでいる 2.ほぼ順調に進んでいる 3.やや遅れ気味 4.遅れ気味 (進捗度が3もしくは4の場合、その理由や問題点等を記入願います。)
<p>新型コロナウイルスの流行により海外渡航が実現しなかったが、当初予定していた研究目的を達成できる見通しは十分に立っていると考えられるため。</p>		
研究実績の概要（今年度）		
<p>今年度は新型コロナウイルスの感染流行により、当初予定していたドイツでの調査及びドイツ人教諭の招聘を行うことができなかった。他方で、1年目に収集した教科書の分析や、ウェブメディアを用いた情報交換を活発に行うことで、来年度以降の継続的なプロジェクト遂行のための基盤を整えるとともに、国際共著論文のかたちで成果を公表した。</p> <p>1)教科書分析 初年度に行った分析に追加して、2020年春に見本本が公表された新指導要領対応の中学校歴史教科書の分析を行った。海外教科書については、今年度は国際教科書研究所での調査が実現しなかったため、国内から研究所のデータベースにアクセスして必要な教科書をピックアップした上で、その一部を購入し、初年度に国際教科書研究所において収集したものとあわせて分析した。これらの成果の一部は、森による修士論文に盛り込まれており、津田による分析結果と結合するかたちで、学会誌に投稿することを予定している。また、中学校歴史分野における外国史(前近代史)の部分に関わる指導案を作成し、現行教科書が有する問題点を踏まえたうえで教師が具体的にどのような授業を展開すべきかについて、1つの提案を行った。ここで得られた成果は今後、現場の教師たちとの協議においてさらにブラッシュアップしていくこととなる。</p> <p>2)ドイツ人教諭との共同研究及び国際共著論文 初年度から続けてきたドイツのギムナジウム教諭コンラート・フレンツェル氏との共同研究を、オンラインメディアを活用しつつさらに進展させ、その成果を国際共著論文</p>		

の形で刊行した。具体的には、日独で進められている歴史教育改革を現場の視点から比較考察し、特に日本における「改革」の批判的検証を行った。

3) 聞き取り調査

本学の社会科学教育専攻の新入生全員に対してアンケート調査を行い、高等学校までの歴史教育において外国史に関する知識がどの程度伝わっているのかについて調査した。この調査により、教員志望の学生においても、大学入学段階では西洋史の基本的な時代区分に関する知識が大幅に欠落しているという点が明らかになった。「歴史総合」必修化以降この傾向はさらに強まっていくことが予想されるため、早急な対策が必要であることが浮き彫りになった。この調査結果は西洋中世学会において「問題提起」として発表した。

4) 意見交換の場の整備

道内の教諭を同行してのドイツでの調査や、ドイツ人教諭を交えた意見交換会は今年度に関しては断念せざるを得なかったが、Web会議システムを利用し、道内中学校教諭数名との意見交換会を開催した。意見交換会においては、初年度の2月にドイツで行ったドイツ人教諭との意見交換の内容を踏まえた上で、道内の学校現場の実態について、幅広く情報交換を行う事が出来たため、3年目以降に規模を拡大してさらに密度の濃い議論を行うための基盤が整備されたと言える。

5) その他

津田が『史学研究』に掲載された論文において、「補論」として本研究プロジェクトの成果(主として初年度の成果)に関する内容を公表した。

教育現場や地域で活用可能な成果等

本研究の成果は、グローバル化する世界情勢に対応した外国史教育のために、中学校教員が利用することができる素材として公表されることとなる(中期計画番号21)。

また、諸外国(特にドイツ連邦)との比較を通じて、わが国の中等教育課程における歴史教育が抱える強みと問題点を明確化したことで、グローバル化に対応した学びのニーズに関する情報の可視化が実現した(中期計画番号21)。

本研究で行った聞き取り調査の成果は、北海道における現状の外国史教育が抱える教育課題を明らかにする機能を有しており、その解決に貢献することが期待される(中期計画番号15)。

海外における教育現場と道内中学校の教諭や教員志望の学生を結びつける仕組みを生み出すことで、地域に貢献する人材養成に結びつけることができる(中期計画番号15)。

研究成果の公表実績(今年度)

【著書】

【学術論文】(投稿中も含む)

- ・津田拓郎・コンラート フレンツェル「日独の中等教育課程における歴史教育の現状と課題」『史流』48号、2021年3月、57-82頁。
- ・津田拓郎「8・9世紀アフロユーラシア世界におけるカロリング期フランク王国」『史学研究』第308号、2021年3月、1-38頁。
- ・森悠人「中学校社会科学教科書歴史分野における前近代西洋史の時代区分について—教科書中にあらわれる中世やルネサンスの扱いについて分析する」(北海道教育大学大学院教育学研究科修士論文)、2021年1月(全29頁)。

【学会発表、シンポジウム、セミナー、演奏会、展覧会、競技会、普及啓発イベント等】

津田拓郎「問題提起：若者の西洋中世離れ—通俗的西洋中世像と中等教育における西洋前近代の取り扱い」『西洋中世学会第12回大会』2020年10月3日、オンライン開催(参加者約150名)

【テキスト、報告書、研修資料等】	
津田拓郎「問題提起：若者の西洋中世離れ——通俗的西洋中世像と中等教育における西洋前近代の取り扱い」(学会発表資料、Web上で公開)	
添付資料	『史流』および『史学研究』校正ゲラ 森悠人修士論文 『西洋中世学会』発表資料
ダウンロード可能な ドキュメント	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/11248 https://researchmap.jp/Takuro_Tsuda/presentations/30267229
関連URL	
問い合わせ先	氏 名：津田 拓郎 電 話：0166-59-1279 E-mail：tsuda.takuro@a.hokkyodai.ac.jp